

### ストラヴィンスキー:イタリア組曲

ペルゴレージらいにしえのイタリア音楽作品をアレンジしたバレエ音楽《プルチネラ》は 1920 年、マシーンの振付によってパリ・オペラ座で初演された。いわゆる「新古典主義時代」の作品とされる本作はその後、ヴァイオリンとピアノのための《ペルゴレージによる組曲》、チェロとピアノのための《イタリア組曲》、ヴァイオリンとピアノのための《イタリア組曲》と、様々なスタイルに編曲された。本曲は 1932 年に名チェリスト、ピアニストティゴルスキーの協力を得て編曲されたもので、5 つの楽章から構成されている。

### ベートーヴェン:チェロ・ソナタ 第 3 番

本曲は、5 曲あるベートーヴェンのチェロ・ソナタのなかでも特に充実しており、演奏頻度も高い。完成は 1808 年で、交響曲第 5 番《運命》や第 6 番《田園》と同じ頃の作品である。スケールの大きなチェロの独奏で幕を開ける第 1 楽章、アタマ抜きの不思議なリズムを刻む第 2 楽章を経て、第 3 楽章は朗々と歌うアダージョの序奏に始まり、生き生きとしたソナタ形式のアレグロ・ヴィヴァーチェへと至る。全曲を通して、ベートーヴェンらしい覇気が感じられる名曲である。

### ブラームス:チェロ・ソナタ 第 1 番

本作は 1865 年の夏、ブラームスが 32 歳の時に完成した。本来は全 4 楽章の作品として着想されたが、緩徐楽章が削除されたため、最終的には 3 楽章構成となった。最初の 2 つの楽章は、荒涼とした風景の道行きのように、チェロがピアノよりも低い音域で歌い、暗いロマンティズムを湛えた音楽となっている。また、自由なフーガ形式による終楽章の主題は、J.S. バッハの《フーガの技法》から「コントラプункトゥス 第 13 番」が引用されている。